

皇學館大学 国文学会会報

第 49 号
令和3年1月

研究室だより

松下道信

今年度（令和二年四月）より、国文学科主任並びに国文学会会長を拝命いたしました。よろしくお願ひいたします。

○

新型コロナウイルスによる激動の一年でした。一月初頭、それは中国武漢で原因不明の肺炎が流行しているという一報から始まりました。その病原体は新型コロナウイルスと名付けられ、あつという間に全世界に拡大し、WHOは国際的な緊急事態を宣言、日本でも徐々に流行を見せるようになりしました。

二月末には全国の小中学校が臨時休校となり、三月末にはオリンピックの延期が決定しました。本学でも三月の卒業式、そして四月の入学式は大幅に規模を縮小し、恒例の神宮参拝は中止となりました。月例参拝も現在に至るまで再開されていません。

四月十六日、政府は全国に緊急事態を宣言。

本学でも全面的に登学禁止となり、全ての講義がオンラインで行われました。その間の校舎の何と静かで寒々しかったことでしょう。五月二十五日、緊急事態宣言が解除。これを受け、本学でも防疫体制を整えた上で、まずはゼミや大学院など少人数のクラスを、次いで六月から百人以下の講義を再開しました。対面授業が再開した際のゼミの様子は今でも忘れることができません。離れた席の学生同士で交わされる視線やささやき声、そして微笑。オンライン授業で失われていたものの大きさに気付かされた瞬間でした。ただし、それ以上の履修者のいる講義は依然としてオンライン授業となり、また二箇月近い大学封鎖に伴う休講に対する補講は九月にまで及びました。後期は十月一日に繰り下げられ、基本的に講義は全て対面式に復しましたが、それでも一部の講義は依然としてオンライン形式で行われています。本年度の国文学科のフィールドワークは中止となるなど、多くの行事に影響が出ました。学生みなさんも新型コロナウイルスには翻弄された一年であったと思います。特に入学したばかりの一年生みなさんは大学に通うこともできず、不安に感じたことでしょう。

目次

研究室だより	松下道信	1
ご挨拶と自己紹介にかえて	吉井 祥	2
委員長より	遠藤彩乃	3
上小倉教授の書が第七回日展に入選		3
上代文学研究部会活動報告	劉 瀟瀟	3
中古文学研究部会活動報告	中川真宏	4
近世文学研究部会活動報告	兒島靖倫	5
近代文学研究部会活動報告	高原由妃	6
国語学研究部会活動報告		
打田楓茄・谷川奈穂		7
漢文学研究部会活動報告	久 知嗣	8
文学館・メディア史研究部会活動報告		
河野亜美		8
平成三十一年度修士論文目録		9
平成三十一年度卒業論文目録		9
平成三十一年度卒業論文報告	岡野裕行	11
令和二年度講義一覽		12
令和二年度研究発表会発表要旨		12
令和二年度講演会報告	千田ひかる	13
合格・就職体験記		14
国文学会活動報告		15
国文学会会則		16

○
このような疫禍の中、本年度の国文学会の活動は縮小せざるを得ませんでした。まず例年五月に行われる総会はオンラインでの開催となったほか、『日本書紀』撰述千三百周年を記念して計画されていた、ゆかりの地への文学散歩も中止となりました。

そうした中、講演会は十一月十二日には広島大学有元伸子先生による「三島由紀夫とアダプテーション―豊かな「誤読」と変奏の世界―」と題する講演がオンライン形式で行われました。実際にお会いできなかったことは残念でしたが、オンラインの特性を活かし、動画を含む、様々な資料を交えた非常に興味深い講演となりました。また倉陵祭は中止になったものの、研究発表会は十一月二十六日に行われました。題目は、奈良奏美氏「趙孟頫の生涯と書の関係について」、久知嗣氏「三国時代における吉凶観」。様々な制約のある中での開催ではありましたが、これらの学会活動を行うことができたことは、非常時の中でもうれしい一事となりました。

○
また、国文学科にも新たな変化がありました。本年度から、中古文学を担当されていた中川照将教授に代わり吉井祥助教が、また長らく事務助手を務められた奥野美佐緒氏に代わり島田規代氏が着任しました。中川先生、奥野さんのこれまでの貢献に感謝申し上げますとともに、吉井先生、島田さんには新たに国文学科を支える活躍を期待したいと思います。

○
新型コロナウイルスによる疫禍はまだまだ先の

見えない状況ではありますが、それでも私たちは学ぶことをやめるわけにはいきません。教員一同、全力で学生のみなさんの学ぶ気持ちに応えるという決意を新たにし、来る一年を迎えたいと思います。

(国文学会会長・教授)

ご挨拶と自己紹介にかえて

吉井 祥

四月から皇學館大学の国文学科に、中古文学担当教員として着任させていただきました。

ご縁をいただけたことに感謝するとともに、責任の重さを感じ、葛藤しながらも、皇學館のことを日々好きになっていきます。今回は、ご挨拶と自己紹介にかえて、研究と授業について記させていただきます。

私は今まで、平安時代の和歌を中心に研究してきました。皇學館の国文学科は現在、上代から近世までの教員が、みな和歌を専門にしていることになります。これは日本でも大変珍しいことで、古代から脈々と続く和歌というものに思いを馳せてしまいました。

和歌というと、皆さんはどのような印象を持っていますか。美しいもの、雅びなもの、技巧が面倒くさいもの、難しいもの……様々にあるかと思えます。私にとつて、和歌は奇妙なものです。日常言語とは異なる、特殊な言語形態が、和歌です。私の専門とする平安和歌には、よく文芸性と

実用性があると言われています。前者はともかく、後者については意外に思われる方もおられるかも

しません。実は、当時の和歌は社交の具、コミュニケーションツールとして機能し、実用的なものでもありました。「日常の言葉で遣り取りした方が、間違えがないのに、わざわざ雅びなことをして、これだから王朝貴族は……」と思われるかもしれませんが、和歌だからこそできたコミュニケーションもたくさんあったのです。

私は学生時代、哀傷歌という人が亡くなった際に詠われる歌を研究していました。人が亡くなることと、それを悲しむことと、それを表現することは、幾重にも隔たりがあるのではないかと思っただけです。特に悲しみを言葉にする、それも和歌で表現するということは、非常に意図的な行為に思えました。また、当時（といってもそれほど昔ではないですよ）も今と変わらず、文学は不要だという論潮が強くあり（これは文学を学ぶ人間が一度は悩むものかもしれませんが）、人が死んだところで和歌を詠んでも、何がどうなるわけではないのですから、最も不要なものが哀傷歌なのではないかと思いました。しかし、不要だと現代人の一部が決めたところで、それがあってもまた事実なのです。ならば、あえて哀傷歌を研究することで、和歌とは何か、人にとつて文学とは何か考えたいと思いました。修士論文、博士論文で哀傷歌と格闘し、そこで見出したものの一つは、人と人が共に生きるために、和歌が機能していたということでした。それから現在に至るまで、「人と人との間で詠まれる和歌」が、研究対象になっていきます。

授業の話に移りましょう。授業は『古今和歌集』と『源氏物語』を軸に展開しています。これはこの二作品が中古文学における二大巨塔だからで

す。(これは私の思い込みではなく、ほとんどの人に賛成いただけることだと思います。詳しく知りたい人は、中古文学の作品をできるだけ多く読んでみましょう。) 来年度もこの二作品を中心に据えつつ、中古文学史を概観する授業や、歌人の個人歌集である私家集の輪読などもしていく予定です。中古文学の研究世界は、ジャンルごとの断絶が危惧されて久しいのですが、枠組みは後世の人間が作ったものでしかなく、実際はそれぞれ相關して成っています。学生が隔たりを持たず、たくさん作品に触れていけるよう、工夫してみたいと思います。また、今後、取り組みたいこととしては、学生と歌集の注釈書を作成し、大学のオープンアクセスを通して公開するというのがあります。学生が在学中に、研究成果として何か形になるものを発信できるとよいと考えています。

私はよく、死ぬまでに何ができるかを考えて仕事をしますが、その仕事は現在、皇學館での教育・研究・校務であることは、望外の喜びです。最善を尽くしたいと思います。

(助教)

委員長より

遠藤彩乃

今年は新型コロナウイルスの影響により、行事等の中止やオンライン授業の実施で慣れない生活が続く、思うような活動をする事が出来ない一年となった。しかし、このような状況だからこそ自分自身やその周りを見つめ直し考えるきっかけ

にもなったと感じる。

今まで、学業やアルバイト、部活動等で目まぐるしい毎日を過ごしてきた。新しい生活様式に伴い、家にいる時間が増えた。初めは何も無い時間でもどかしく感じたが、ふと時間が無いからと読みかけのままにしていた本を読んだ。それから文学に触れる時間がこれまでよりも圧倒的に多くなり、そのおかげで私は文学が好きなのだと思えて実感することができた。何もすることが出来ないと思っていた時間を私は文学に費やすことができ、立ち止まってみることの大切さに気付かされた。

これまで過ごしてきた三年間を思い返すと、楽しい思い出ではなかったが、どれも自分の成長に繋がるものであったと思う。残り一年程の大学生生活、過去の私とこれからの私のためにも、新しい過ごし方と上手く付き合い悔いなく過ごしていきたい。

(三年)

上小倉教授の書が第七回日展に入選

上小倉一志(積山)教授が、改組新第七回日展に入選された。作品は「李白詩」。

古稀藏書重長刺雅聖聲
雙懷奏越藏越吟比莊馬

上代文学研究部会活動報告

劉 瀟瀟

上代文学研究部会は、大島先生のご指導のもと、春学期は金曜日の三時間目、秋学期は金曜日の四時間目に活動しました。今年度のメンバーは、大学院生一人、四年生一人、二年生一人、留学生二人計五人です。教科書として井手至・毛利正守校注『新校注万葉集』(和泉書院)、坂本信幸・毛利正守編『万葉事始』(和泉書院)を使っています。コロナの影響で、上代文学研究部会は対面授業再開後、活動がしばらく中止になっていましたが、メンバー同士間隔がおける図書館二階のラーニングコモンズを利用することで、七月中旬から、活動がようやく再開しました。

春学期から秋学期の前半にかけて、『万葉集』の中で興味のある和歌を対象に、メンバーが順々に発表する形で進めました。発表者は歌を注釈書などで調べ、考察も含めて資料を作っておきます。研究発表の時に、みんなが意見交換すること、歌について理解が深まりました。秋学期の後半は『万葉集』の一番歌から六番歌を伊藤博『万葉集全注』と阿蘇瑞枝『万葉集全歌講義』等を利用して、みんな一緒に数回で読み進めました。

私にとって印象的な歌を紹介します。

まず、「大伴宿禰家持初月歌一首」と題する「振り放けて三日月見れば一目見し人の眉引き思はゆるかも」(巻六・九九四)という歌です。諸注釈書が述べているように、この歌は大伴家持の作歌年代の知られる最初の作で、天平五年十六歳の作です。『全歌講義』には「ふり仰いで三日月を見ると、

たった一目見たあの人の眉のあたりが思い出されるよ」と現代語訳されています。

大伴家持のこの初月歌は、大伴坂上郎女の初月歌「月立ちてただ三日月の眉根搔き日長く恋ひし君に逢へるかも」(巻六・九九三)の直後に配列されていますので、注釈書によると、「坂上郎女の歌と同時に同題で作ったものかもしれぬ」(『万葉集私注』)、「九九三歌と同時の題詠。坂上郎女の指導があったか」(『万葉集全解』)、「郎女の歌に応じうる宴歌になっている」(『万葉集私注』)などと指摘され、『全歌講義』には「坂上郎女の前出歌と同じ宴席で同じく初月を主題として詠んだ題詠である」と帰結されています。

その点について、鉄野昌弘氏は五世紀の中国の詩人鮑照の「城の西門解中に月を翫ぶ」という漢詩の詩句「娟娟として娥眉に似たり」(月はあでやかで女性の描き眉に似ている)を例示しており、「初月の歌」のような題を持つ歌の多くがそのような当時伝わっていた「詠物詩」という漢詩のジャンルに倣っていた「詠物歌」だと述べていました(「初々しい初恋を歌う」『大伴家持 日本人のこころの言葉』創元社、平成二十五年)。

私は初めてこの歌を読んだ時、これは恋歌ではないかと思ってしまう。三日月を見ることで、自ずから憧れている「一目見し人」の眉を思い出されることはロマンチックに感じられました。しかし、この歌は「相聞」の歌ではなく、「雑歌」の部立に収められており、坂上郎女の初月歌の直後に配列されたのは、やはり題詠的に詠まれた歌として考えたほうが良いと見直しました。

次に、秋学期の後半読み進めた「雑歌」の部立に入れている一番歌から六番歌も興味深い

です。一番の雄略天皇の御製歌が求婚歌と見られており、リズムが心地よく感じられます。伊藤博『万葉集全注』に記述されている以下の一番歌の「名」についての解釈が気になっています。

「名」は真の名の意。古代人は、母親と自分だけが知っている本当の名(大きい名)と、世間に通称(あざ名)として呼ばせる嘘(うそ)の名(小さい名)とを持ち、本当の名は秘密にするのを習いとしらしい。真の名は生命(人格)そのものであり、それを人に告げることは自分を人に預けてしまうことになるという考えによる。だから、男女のあいだで名を尋ねることは求婚を、名を明かすことは応諾を意味した。名を先に問いかけるのは男であるのが普通。

現在でも、苗字と下の名前の使い分けも古代人のそのような意識の存続だろうかと思われる。

このように、『万葉集』の和歌を読むことで、日本文化についていろいろ勉強になります。本当に貴重な時間でありました。

(四年)

中古文学研究部会活動報告

中川眞宏

本年度の中古文学研究部会は吉井先生のご指導のもと、大学院生一名、三年生二名、二年生一名、計四名での活動となりました。活動時間は参加学生の空き時間に合わせて、相談のうえ決定をしています。

研究部会は春学期に三回、秋学期に二回行い、『源氏物語』桐壺巻や須磨巻、『枕草子』「正月一日は…」など、学生が選んだテーマを中心に扱ってきました。『源氏物語』や『枕草子』というと、義務教育課程での定番教材であり慣れ親しんだ作品ですが、周知されている作品ゆえに先達が書いた注釈は多岐にわたります。その中で、『源氏物語』では『新編日本古典文学全集』を底本とし、『岷江入楚』や、『日本古典文学大系』、『源氏物語評釈』、『新潮日本古典集成』、『新日本古典文学大系』などを読み比べました。『枕草子』「正月一日は…」では、『新編日本古典文学全集』を底本とし、『枕草子解環』、『日本古典文学大系』などの先行研究を読み比べてきました。

研究部会の進め方は「発表形式」で行われました。「発表形式」とは、メンバー一人ひとりが担当する本文と先行研究をプリントにまとめ、発表するというものです。上記で挙げた先行研究書をメインに、ジャパンナレッジや、和歌&古典ライブラリーなどの電子検索サイトも用いながら、用例検討を行ってきました。

『源氏物語』の桐壺巻を選んだ経緯は、「引歌」をやりたいという学生の意見があり、研究会一回目なので活動メンバーにも馴染みの深い作品でやった方が良いと考えたからです。また、『源氏物語』は続き物だから途中からするのは大変だと話し合い、桐壺巻からはじめました。「引歌」とは、「散文中で先行和歌を踏まえた表現を用いること、またその和歌をいう」(『源氏物語事典』)とあります。注釈書を見比べながら、これは引歌なのか、すでに定着していた常套表現なのかを議論するのは難しかったですが、千年も前の常識や

言い回しについて考える視点を得ることができた。須磨巻では、光源氏がどんな気持ちで須磨に退去したのかと考えたり、自分が光源氏だったらどこに退去するのか考えたりするなど、作品の読解や心情について深く考える良い機会になりました。

『枕草子』の「正月一日は…」は、平安時代の行事について学ぶきっかけとして選びました。私が担当した場面では、お正月のイベントについて述べられていました。正月一日には「宮中では四方拝・朝拝・節会など、一般では年始の礼」があり、七日には、「七種の菜を食し万病邪気を払う」行事や、「節会の白馬」十五日には「節供あり」や、「除目」などが挙げられています。

「節会の白馬」とは「馬は陽の獣、青は春の色で、正月七日に青馬を見ると年中の邪気を除く」という中国の習俗によって、当日宮中で天覧があった。青馬とは青白雑毛の馬なので、のちに白馬とも書いたとも、全くの白馬に代えられたので白馬と書いたともいう」（『新編日本古典文学全集』）とあるように、馬を見る会のことです。

このように、『源氏物語』桐壺巻や須磨巻、『枕草子』『正月一日は…』の読解を通して、『源氏物語』や『枕草子』の基礎理解や、和歌の基礎知識の習得など、沢山の学びを得ることができました。5GやSDGsなど新しい技術や文化にこそ新しい発見があるのだと考えていましたが、この研究部会を通して、既に知った気だった『源氏物語』や『枕草子』から、まだまだたくさん学べることに気づかされました。知識が深まると新しい疑問が生まれてきて、また知識が深まって、新しい発見があるという学びのサイクルが生まれてき

て楽しくなってくるというのは、古典教育において、とても重要な視点になるのではと感じました。分らない言葉や言い回しもあり、自らの知識量のなさを痛感した場面もたくさんありました。だからこそ、来年度も研究部会を通じて、先生のご指導のもと、学びのサイクルを続けていき、伝統文化の継承に努めたいと感じました。

(三年)

近世文学研究部会活動報告

―『増補古言梯標註』について―

兒島靖倫

山田常典『増補古言梯標註』（弘化四年刊）は、清水浜臣『古言梯再考増補標註』（文政三年刊）を承けて編纂された仮名遣い書である。しかし、本文批判を進めてゆくと、実際は『古言梯再考増補標註』以外の文献も参照している可能性が考えられる。その一つとして、このたび披見することができた小山田与清の手沢本『古言梯』を紹介する。以下においては便宜を図って〈与清本〉と呼ぶ。

〈与清本〉は早稲田大学図書館に所蔵されており、全体にわたって夥しい書入が施されている。頭書や行間において、青墨で村田春海説の書入があり、墨で新たな語彙と自説を書き込んでおり、朱墨で清水浜臣説の書入がある。さらに、見出し項目の仮名遣いにおいて、朱墨による修正が少なからず見られる。

本報告は、この〈与清本〉を基軸に据えて、こ

れまで考察されていなかった『増補古言梯標註』の成立過程を推定し、それと同時に〈与清本〉が有する資料的価値についても考える。なお、以下においては便宜を図って『増補古言梯標註』を〈常典本〉と呼び、『古言梯再考増補標註』を〈浜臣本〉と呼ぶことにする。

○

まずは「採録された語彙」に関して考察することにする。実際に掲載されている項目数を整理すると、〈浜臣本〉が一六八二語で、〈常典本〉が一八四一語である。その差は一九九語であるが、二語が〈常典本〉に引き継がれていないので、これらを除けば両書に採録された語彙の差は、実質的に一六一語である。この一六一語が、いかにして採用された語彙であるかを知る手掛かりとして、〈与清本〉の記述に着目したい。

たとえば〈与清本〉の欄外に、「あをに」（青土）と「あをみ」（艶艶）という語彙がある。これらは〈常典本〉に採録される語彙で、「あじか」（簀）と「あふぎ」（扇）との間に配置されているのであるが、〈与清本〉も同じ語彙の間に位置している。また、それぞれの語釈を見ると、引用している文献名のみならず、引用している箇所も一致している。

ここで注目したいのは、〈常典本〉の「あをに」（青土）と「あをみ」（艶艶）を見ると、語彙を囲んでいる枠の四つ角が切れているのが確認できることである。この四つ角が切れている項目を全て調査した結果、それらは原則として新たに増補された語彙であった。以上のことから、〈常典本〉の見出し項目に見られる四つ角の切れは、〈常典本〉に増補された語彙の判断基準となるといえる。

さて、〈与清本〉の欄外に書き込まれた語彙を整理すると、全部で六七語が確認できる。このうち〈常典本〉と一致する語彙は、全部で三九語あるので、過半数に相当する語彙が、常典によって利用されたといえる。その三九語は、いずれも〈常典本〉の位置のみならず記述内容も一致しており、見出し項目は四つ角が切つてある。

以上のことから、〈常典本〉は語彙を増補するための編纂資料として、〈与清本〉を利用していると言つてよい。

○

次いで「頭注の記述内容」に関して考察することにする。というのも、〈常典本〉の頭注に散見される与清説は、そもそも〈浜臣本〉に存在しないからである。したがつて、〈常典本〉における与清説は、常典が〈与清本〉を参照した可能性が高いと考えられる。実際に〈与清本〉と〈常典本〉とを比較すると、全部で四五条あることが見て取れる。

頭注の多くは「新たな出典を明示するもの」で、全部で四三条ある。たとえば〈浜臣本〉にはない「田中道麻呂云」が〈与清本〉にはあり、それが〈常典本〉に採用されている。また、上代文献でない『将門記』などの文献を例証として示している。さらに、与清説であるにもかかわらず、明記していないものもある。

また、中には「説を訂正したもの」もある。これは「とじ」（戸母）と「もむのふ」（桃生）の二条が確認できるのみである。いずれにも共通するのは、『古言梯』から全く訂正されていないかった項目に〈与清本〉が寄与しており、与清の指摘が頭注として〈常典本〉に引き継がれていること

である。

以上のことから、〈常典本〉の頭注もまた、〈与清本〉を下敷きにして構成されていることがわかる。

○

以上、〈常典本〉に関して、「採録された語彙」と「頭注の記述内容」の検討から得られた成果として、〈常典本〉は〈浜臣本〉のみならず〈与清本〉を有力な取材源としている、ということである。この点において〈常典本〉は、江戸派における語彙研究の集大成ともいふべき文献であり、近世期の国語研究史上において注目するに足るものといえる。

（博士後期課程）

近代文学研究部会活動報告

〈研究ノート〉

萩原朔太郎の詩草稿「夜景」から
の展開

高原由妃

今年度の近代文学研究部会では萩原朔太郎の「猫」（ARS）第一巻第二号、大正四年五月。後に詩集『月に吠える』所収の草稿研究を行った。今回、研究を行っていくうえで、「猫」の草稿の一つである「夜景」が興味深い他作品への生成過程をもっていることが確認できたため、「夜景」を中心にその展開を見ていきたいと思います。

「猫」の基となった草稿は「春夜」「春の夜」「夜景」の三つである。「春夜」「春の夜」はそれぞれ「猫」のみに展開する。なお、『月に吠える』に同

名の「春夜」という詩が登場するが、その内容からして、ここでの草稿「春夜」から発展したものではないと考える。

ここで注目したいのは、草稿「夜景」が他二篇の草稿と違い、「猫」だけでなく、「夜景」「病気の探偵」へと展開していくことだ。左に草稿「夜景」の全文を掲げる。

夜景

高い屋根の上で猫が寝て居る、
猫の尻尾から月が顔を出し、
月が青白い眼鏡をかけて〈居る〉見て居る、
だが泥棒はそれを知らないから、
近所の屋根裏へひつこりとび出し、

〈まつくろ《くろ》けの衣裳をきこんで〉

なにかまつくろの衣裳をきこんで、
煙突の窓からしのびこも。〔ま〕うとする
ところ、

（筑摩版全集第一巻より引用。〈 〉内は抹消された行、語句。《 》内は〈 〉内の抹消に先立ち部分的に推敲抹消された箇所。〔 〕は仮名遣いの誤りの箇所。〔 〕内はその訂正である。）

草稿「夜景」は、まず若干の改稿のうえ、「夜景」として『卓上噴水』第一集（大正四年三月）に発表されたが、その後に詩集に収められることは無かった。また、草稿「夜景」の第一、二行が前掲「猫」へ、第三行目以降が草稿「病気の探偵」へと展開するが、この「病気の探偵」は発表されることはなかった。さらにこの「病気の探偵」は「干からびた犯罪」（『詩歌』第五巻第六号、大正四年八月。後に『月に吠える』所収）へと展開したと推測できる。次に、各作品の発表年月を改めて整理し

て示す。

大正四年三月「夜景」

大正四年五月「猫」

大正四年六月「干からびた犯罪」

ここから、草稿「夜景」執筆時期は、初出の大正四年三月よりも前だと確定でき、また、「干からびた犯罪」の原形である草稿「病気の探偵」も近い時期、遅くとも大正四年六月より前に書かれたものだと考えられる。なお、「干からびた犯罪」の草稿（筑摩版全集第一巻所収）も存在し、この草稿は「病気の探偵」と初出「干からびた犯罪」との中間の時期に執筆されたものと推測できる。

それでは、ここからは草稿「夜景」、草稿「病気の探偵」、草稿「干からびた犯罪」、初出「干からびた犯罪」の四篇の犯罪モチーフの変化を追って行きたいと思う。

まず、草稿「夜景」では、煙突の窓から家へ忍び込もうとする「泥棒」が描かれる。しかし、草稿「病気の探偵」では毒殺による「殺人」が描かれ、草稿・初出「干からびた犯罪」では凶器による殺人へと変化する。

また、探偵というモチーフも殺人モチーフと同様に草稿「病気の探偵」から出現し、「干からびた犯罪」へと引き継がれる。

ここで注目したいのは、この四篇に一貫して犯罪を見つめる存在が書かれていることだ。草稿「夜景」には「月が青白い眼鏡をかけて見て居る」、草稿「病気の探偵」には「不幸な瞳がじつとみつめて居る、／みつめる床の上に／亜硫酸の光る粉末／鉱物性の哀しい微光……」、草稿・初出「干からびた犯罪」には「こゝに倒れた椅子がある／

こゝに凶器がある／こゝに死体がある／こゝに血がある」と、犯罪を観測する視点が描かれている。「泥棒」から「殺人」へと大きく変化しているが、その犯罪を見つめる「月」と「探偵」が作中において同様な働きをしていることは非常に興味深い。

(二年)

国語学研究部会活動報告

打田楓茄・谷川奈穂

本年度の国語学研究部会はCLL活動「伊勢市史の利活用」と協働して実施しました。『伊勢市史』は平成十一年度～平成二十四年度にかけて刊行されましたが、歴史に関心のある人達以外にはあまり活用されていないので、利活用を進めるにはどうすればよいかを考えるというのがCLLのテーマです。

国語学研究部会としては、それぞれの文体や文章構成から考察することになりました。

まず、古代編「伊勢神宮の創始」については、史料の解説を進めながら記述されているが、どうしても史料自体が専門性を持っているため、中学生が読んでもわかりやすい内容にはなっていないように感じられました。古代編は関心の高い巻であるはずですが、説明が必要な専門用語も多くあり、誰もがすぐに読めるものではないという結論になりました。

次に、近世編「伊勢参宮」について内容を確認しました。こちらは古代編と違って、具体的イメージが湧くような記述になっていてわかりやす

いなどの意見が出ました。

文化財編と同じように、近世編であれば紹介することもできそうだという結論になりました。

さらに、中世編から「源頼朝と伊勢」を読みました。こちらも古代編と同じで用語等が難しく感じられました。

最後に、現代編から「(四) 新図書館の設置」を読みました。伊勢市の例と対比させて、それぞれ自分の住む自治体図書館の利用状況をホームページで調べるなど、話題が広がりました。

身近に捉えられる記述は短いものでも読んでもらえるきっかけづくりになるという意見でした。

CLLとしては、昨年度、文化財編を読んで、漫画化に取組みました。伊勢市教育委員会の増田研一郎さんのお話でも、『伊勢市史』そのものを読んでもらうことは難しいので、何らかの方法できっかけづくりをすることが大切だということでした。

国語学の面からも、文体が史料を多く含む論説体になっていたり、専門用語の出現率などが高い巻は、読みやすさの面で課題があります。一方で、語り文体になっているものや図表を多用して説明するものは、読解が容易であるという結論になりました。

今後、普及させていくためには、漫画にするか、子ども向けの絵本や童話風にすれば、親しみをもってもらえるのではないかという方向で進めていくこととしました。

(二年)

漢文学研究部会活動報告

久 知嗣

本年度の漢文学研究会は、十一月から隔週水曜日の四限目に松下先生の研究室で活動を行った。活動内容は『史記』天官書を読むことである。以下、中国古代の天文についてまとめることで、活動報告にかえたい。

天官書というのは、『史記』以降、二十四史では主に天文志という名称で記されており、星々の性格や五惑星、日、月などの天文現象に関しての解説をしている部分である。天官書では天を五つに分けており、それぞれ中宮、東宮、南宮、西宮、北宮とされている。この中で天の中心となるのが中宮である。

天官書という名称の意味については、『史記』の注釈書である『史記索隱』に書かれている。『史記索隱』では「案、天文有五宮。官者、星官也。星座有尊卑、若人之官曹列位、故曰天宮」とある。この「天文に五宮有り」というのが、中宮、東宮、南宮、西宮、北宮のことを指していると考えられる。また、星に尊卑があることが人間の官位と同じようであるため天官というと記されている。ここから中国の天文観がうかがえる。

中国の天文観の根本には、天体を二十八宿という分野に分け中国の各地域に当てはめ、星々を皇帝や諸侯などの官職として見ているということがある。また天体に異変があると、それは実際の国家の異変につながると考えられていた。そのため、天文現象に異常が見えると、その意味を判断する必要があった。これが中国古代の天文学であつた。

た。いわゆる占星術であるが、中国古代の天文学は現代の占星術とは少し異なる部分がある。現在占星術というと、例えば十二星座によって自身の運勢を判断するというように、個人の運勢を知るために用いられることが一般的である。しかし、中国古代の占星術は個人に対してではなく、天文観測によって国家やその支配者の運命を判断するために用いられていたという特徴がある。『史記』天官書をはじめ、その後天文志が正史で書かれたのもこれが理由であると考えられる。

『史記』から『晋書』の天文志までをたどってみると、『史記』を受けたものが、『漢書』天文志である。『漢書』は『史記』と類似した記述であるが、相違点としては実際に歴史上で起こった天文現象が挙げられているという点があり、これは『史記』から発展した点である。また、『後漢書』天文志では『史記』『漢書』を踏まえつつ、実際に起きた天文現象に対する解釈・占例などが詳細に記されている。さらに『晋書』天文志は、各星宿の性格や天変の解釈や意味、またその証拠として実際に歴史上で起こった天文現象をも含んでおり、中国古代の天文学の集大成であるといえる。また三国時代の天文現象も含んでいるため、『三国志』に天文志がないこともカバーしているといえよう。

本年度実際に読んだ部分は多くはなかったが、中国古代の星図を見つつ、天官書の記述に従いその星を確認していく作業は興味深かった。『史記』天官書はまず、天の中心である中宮の説明から始まる。この中宮の中でもっとも明いものは太一という。太一というのは、天帝の別名であり、現在のこぐま座βのことであるとされる。太一は北

極星のような存在であると考えられ、北極点に近く明るい星であることが確認できた。ただこれは現在の北極星とは異なっている。現在の北極星はこぐま座αである。このような違いは地球の歳差運動によって引き起こされており、『史記』で書かれている星を現在の星図で見ることには注意が必要であることがわかる。

本年度は『史記』天官書をそれほど読み進めることはできなかったが、来年度も引き続き『史記』天官書を読み進めていければと思う。

(博士前期課程)

文学館・メディア史研究部会活動報告

河野亜美

文学館・メディア史研究部会では、昨年度からビブリオバトルについて話し合いを行っている。研究部会のメンバーが皆、ビブリオバトルを行うところから、過去の経験を活かした議論を重ねた。今年度は研究部会としての学内活動の範囲を大きく越え、個人的にも全国規模でのビブリオバトル普及活動にかかわることになったため、その経緯と成果について報告したい。

大学入学以後にビブリオリアで行ってきた普及活動や、令和元年の「全国大学ビブリオバトル2019」首都決戦「出場という実績が認められ、私は令和二年六月にビブリオバトル普及委員会の理事に就任した。ビブリオバトル普及委員会とは、知的書評合戦ビブリオバトルをより広く普及させることを目的に活動する任意団体である。

ビブリオバトルに関する書籍の出版や、活動の手本となる動画の配信、関連情報の発信を行っている。理事の仕事として私が受け持つこととなったのは、主催事業である「ビブリオバトル・シンポジウム2020」の実行委員長である。

ビブリオバトル・シンポジウムでは、ビブリオバトルの持つ可能性や展望、より効果的に活用する際の課題などについて、さまざまな論点に整理し、パネルディスカッションの形式で議論することを目的に、平成二十六年から毎年実施している。過去のシンポジウムでは、「学校教育」「地域コミュニティ」「図書館」「本を通じた出会い」などをテーマにパネリストを集め、ディスカッションを行った。実行委員長を任せられたため、今回のシンポジウムのテーマやパネリストの選択が私の一存に委ねられた。しかし、私自身は未だ学生であり、普及委員会に所属して日も浅い。私が出来ることは限られており、大役を担った当初は不安でいっぱいであった。岡野先生に相談に乗ってもらい、「ちいさいコミュニティ」をテーマに掲げることとした。例年は本や教育にかかわるお仕事をしている人たちがパネリストに選ばれていたが、今年度のシンポジウムでは、ビブリオバトルを行うことを目的とした小規模なコミュニティをつくってきた人たちを選出した。大学のサークル活動という小規模コミュニティでの自身の経験を最大限に活かして、新しい雰囲気をもたせるように舞台を整えることを意識した。

ビブリオバトルは、京都大学の有志ゼミにて平成十九年に誕生した。小規模なコミュニティは、ビブリオバトルの原点であると言える。昨年度(令和元年十一月)の「ビブリオバトル・シンポジウ

ム2019」に聴衆として参加したとき、観客から「新しく活動をはじめにはどうすればいいの」「人を集める方法は」といった質問が多く寄せられていた。また、例年のシンポジウムの開催テーマは、学校や図書館、大会運営を前提にした議題が多く、初歩的な問題には回答する機会に恵まれなかったように思う。今年度に「ちいさいコミュニティ」をテーマとして掲げたことで、ビブリオバトルを新しく始めたいと思う人へのアドバイスを示し、現在所属しているコミュニティをより一層過こしやすくなるための道筋を示す場を設けることができたのは、諸団体や普及委員会においても良い契機となったのではないかと思う。

例年、二〇〇人規模を対象として開催していた「ビブリオバトル・シンポジウム」であるが、今年度はオンラインでの開催ということもあり、動画公開の十一月二十一日を終えた段階で、おおよそ四〇〇人が視聴するという結果となった。現在でも視聴数は増加しており、例年よりも多くの人々に情報を発信することができたように振り返っている。今回のシンポジウムをきっかけに、ビブリオバトルの普及がより一層進むことを願っている。

なお、岡野先生との共著にて、令和二年九月に「三重県における高校生ビブリオバトルの参加側と普及側の立場から見てきたこと」(『図書館界』第七十二巻三号)という論文を発表したことを付記しておく。

※「ビブリオバトル・シンポジウム2020」公式ウェブサイト <https://bibliobattle.wixsite.com/symposium2020/>
配信動画 <https://youtube/psV8vZ28vs8>

(四年)

平成三十一年度

修士論文目録

(令和二年三月授与)

森鷗外『雁』における

漢文学の影響について

豊子愷『源氏物語』諸要素の研究

―「記後記」を発端に―

靳 倩倩

陳 琰

平成三十一年度

卒業論文目録

(令和元年九月卒業)

顧青霞の『聊齋志異』への

影響について

―『聊齋志異』の後ろに佇む女―

『万葉集』と『詩経』の

比較文学的研究

―「葛」を中心に―

『源氏物語』の研究

―浮舟の「袖ふれし人」は誰―

『こころ』における人間不信

王 思琰

党 晨丹

李 亜麗

劉 慧玲

(令和二年三月卒業)

少女小説から少女漫画へ

持物から見る『西遊記』

情報交換用漢字符号の研究

―魚偏と禾偏の比較―

万葉集、遣新羅使歌群の研究

宮沢賢治「よだかの星」論

―よだかの行方―

上代における月と変若水の研究

大谷 優佳

阪井 則文

藤川 慎也

東 耕平

東 拓歩

安藤 凌夢

夏目漱石について
万葉集羈旅歌の研究

石垣 佑菜
石田 智也

―柿本人麻呂羈旅歌八首を中心に―
三島由紀夫と武田泰淳における

市野那由他

健康と不健康

陳述の副詞の研究

井手測亮太
伊藤 謙吾

片岡鉄兵「歩きつづける男」

伊藤 謙吾

―歩行の意義―

芥川龍之介論

伊藤 祐太

―「魔術」における制約の真偽―

書物文化の考察

伊藤 優太

文学作品から見る江戸時代教育

稲葉ゆきの

姫の研究

井上 遥

菊池寛研究

岩田 りさ

松尾芭蕉の研究

岩野 和磨

―伊賀から伊勢へ―

米原万里研究

岩本 汐里

坂口安吾『夜長姫と耳男』論

牛場 龍世

―五つの物語とのつながりからの作品の流れ―

類聚名義抄の研究

梅山 瑞加

―「況」の訓の出典をめぐる―

三島由紀夫『潮騒』における

榎本 京介

最後の一節

万葉集、聖武天皇行幸歌群の研究

大平 朋佳

『百人一首』近世受容史の研究

押田みずき

―「折らばや折らむ」の解釈史をめぐる―

近代文学の研究

落合 真優

―梶井基次郎『Kの昇天』―

文学作品における表現の

小野 結菜

変遷について

―川端康成「伊豆の踊子」を中心に―

勝井 仁美

大和言葉の概念に関する研究

意味・用法の変遷についての研究

加藤 亮

―「紫女」をめぐる―
『源氏物語』の研究

加藤 亮
加納 成

―物の怪出現の要因について―
小川未明「赤い蠟燭と人魚」論

川真田竜将

―「人魚」「人間」「神様」の

紀平 小咲

―「語り手」による「作者の意図」の

切上 浩輔

蘇軾についての研究

工藤 大地

―生涯と書作品との関係性―

倉田 竜弥

現代語形容詞の意味・

用法に関する研究

『葉桜と魔笛』論

小夏 将徳

『永訣の朝』における

賢治の宗教的思想

―賢治作品を相補的に用いながら―

『西遊記』における龍について

敬語の研究

小林 真重莉

―報道における皇室をめぐる―

『列仙伝』にみえる山について

―稷邱君と邳子を中心に―

日本語祖語の研究

万葉集旋頭歌の研究

柴原 騎士

―巻七・二二七八番歌を中心に―

文学とアイドル

―朝井リョウ『武道館』から見る親和性―

万葉集植物歌の研究

―「アサカホ」を中心に―

玉城町の方言研究

―梨の栽培過程を中心に―

『源氏物語』の研究

―夢浮橋巻手紙の拒否と浮舟の気持ち―

鐵道をめぐることばの研究

―三重県内の「川」を含む駅名について―

流行語の研究

―「チョ」の機能をを中心に―

谷崎潤一郎の作品について

―心理的作用から見た『刺青』仮説―

近世怪談の研究

―「雨月物語」「吉備津の釜」における

磯良の設定について―

―なぜ「書聖」と呼ばれるのか―

谷崎潤一郎「春琴抄」論

時刻を表す語彙の研究

―「かわたれ」「たそかれ」の考察―

絵本研究

―「あかいくつ」の変遷を辿る―

龍門造像記について

―龍門二十品の起筆・収筆・点折―

若者ことばの研究

多気方言の研究

―果樹栽培の場合―

泉鏡花「外科室」論

―「画師」と「予」二つの視点―

文学における出版流通の研究

―円本を中心に―

趙孟頫の生涯と書の関係について

太宰治『女生徒』論

―オノマトペを中心に―

横光利一『花園の思想』論

西村 真侑

『源氏物語』の研究

瀬田 純菜

―夢浮橋巻手紙の拒否と浮舟の気持ち―

鐵道をめぐることばの研究

―三重県内の「川」を含む駅名について―

流行語の研究

―「チョ」の機能をを中心に―

谷崎潤一郎の作品について

―心理的作用から見た『刺青』仮説―

近世怪談の研究

―「雨月物語」「吉備津の釜」における

磯良の設定について―

―なぜ「書聖」と呼ばれるのか―

谷崎潤一郎「春琴抄」論

時刻を表す語彙の研究

―「かわたれ」「たそかれ」の考察―

絵本研究

―「あかいくつ」の変遷を辿る―

龍門造像記について

―龍門二十品の起筆・収筆・点折―

若者ことばの研究

多気方言の研究

―果樹栽培の場合―

泉鏡花「外科室」論

―「画師」と「予」二つの視点―

文学における出版流通の研究

―円本を中心に―

趙孟頫の生涯と書の関係について

太宰治『女生徒』論

―オノマトペを中心に―

横光利一『花園の思想』論

西村 真侑

― 結核に苦しめられた人々 ―

万葉集の梅の歌についての研究

― 巻八・二六四九番歌を中心に ―

岸田國士『古い玩具』の研究

― 背と眼 ―

又吉直樹『火花』研究

『探偵』と狂気

― 江戸川乱歩『D坂の殺人事件』と

『屋根裏の散歩者』 ―

『三国志演義』における

吉凶の兆しについて

葉山嘉樹『セメント樽の中の

手紙』論

宮澤賢治『よだかの星』論

― よだかの兄妹と結末 ―

文房四宝について

標準語の位置付けについての

史的研究

鳥羽方言の研究

芥川龍之介『藪の中』論

― 証言・告白の矛盾をめぐって ―

坂口安吾『海の霧』の研究

― 鮎子の人物像をめぐって ―

国木田独歩『春の鳥』論

― 「私」が讚美しようとしたものについて ―

小説の中の図書館について

メディアミックスについて

絵本の研究

― 教育現場における「絵本」の

活用方法について ―

パノラマとセメント

― 江戸川乱歩『パノラマ島奇譚』と

同時代作品より ―

草野心平と千原英喜の

「わが叙事詩」

伝統技法と命名の研究

― 和菓子をめぐって ―

呉昌碩について

― 行書作品に影響した篆書筆法 ―

新見南吉について

― 『手ぶくろを買いに』を中心に ―

内田百閒『冥途』論

谷崎潤一郎『刺青』論

― 作中での刺青の意味合い ―

甲骨文について

― 皇學館大学蔵甲骨についての調査 ―

志摩方言の研究

― 魚類の地名について ―

黄庭堅についての研究

篆書について

― その復興と衰退 ―

運搬をめぐる方言の研究

― 「つる」を中心に ―

江戸川乱歩『心理試験』論

― 専業作家を決めた評価 ―

岸田國士『古い玩具』論

― 受動的な主人公、留雄 ―

呉昌碩についての研究

長崎方言の研究

― 「なば」について ―

米芾について

罵詈雑言についての研究

鈴鹿市沿岸部の方言研究

児童文学作品の変遷の研究

― 「シンデレラ」を題材として ―

大台方言の研究

『源氏物語』の研究

― 二人の養母をめぐって ―

平成三十一年度卒業論文報告

岡野裕行

平成三十一年度末の卒業論文提出者は九十九名。提出された論文のうち、優が十八名、良が五十四名、可が二十七名で、不可はいなかった。なお、九月提出者は四名で、いずれの評価も良であった。

優秀論文上位九名の題目は次の通りである（第十位に複数名が並んだために上位九名までとした）。奈良奏美「趙孟頫の生涯と書の関係について」、押田みずき「『百人一首』近世受容史の研究」―「折らばや折らむ」の解釈史をめぐって―、松田悠佑「国木田独歩『春の鳥』論」―「私」が讚美しようとしたものについて―、西川なつみ「太宰治『女生徒』論」―オノマトペを中心に―、森菜々子「呉昌碩について」―行書作品に影響した篆書筆法―、堀井美里「坂口安吾『海の霧』の研究」―鮎子の人物像をめぐって―、梅山瑞加「類聚名義抄の研究」―況の訓の出典をめぐって―、萩原里帆「岸田國士『古い玩具』の研究」―背と眼―、久知嗣「『三国志演義』における吉凶の兆しについて」。以上。

（准教授）

村上かなえ

本弘 大賀

森 菜々子

森 実沙

森下 雄揮

森田 和希

安田 悠人

藪木 雅矢

山口 敬也

山口 秀太

山口 輝

山下 紘輝

山中 麻由

山本 瑠那

吉澤 悠斗

吉田 潤生

吉田 千紘

米川 光輝

若宮 碧

令和二年度 講義一覧

〔文学部〕国文学概論ⅠⅡ（田中康二・小堀洋平）／国語学概論ⅠⅡ（齋藤平）／漢文学概論ⅠⅡ（松下道信）／国文学史概説Ⅰ（大島信生・吉井祥・深津睦夫）／国文学史概説Ⅱ（田中・岡野裕行・小堀）／古典文学講義ⅠⅡ（大島・吉井・深津・田中）／近代文学講義ⅠⅡ（小堀・岡野）／国語史概説ⅠⅡ（齋藤）／書誌学概論（田中）／古典文学購読ⅠⅡ（大島・吉井・深津・田中）／近代文学購読ⅠⅡ（小堀・石谷春樹）／国語学購読ⅠⅡ（齋藤）／漢文学購読ⅠⅡ（松下）／専門演習ⅠⅡ（大島・吉井・田中・小堀・岡野・齋藤・松下・上小倉一志）／プロジェクト研究ⅠⅡ（大島・吉井・田中・小堀・岡野・齋藤・松下・上小倉）／言語表現学概論ⅠⅡ（小堀）／国文法概説ⅠⅡ（大島）／日本語教授法（濱畑静香）／社会言語学（齋藤）／図書館概論（岡野）／情報資源組織論（千邑淳子）／子どもの本と児童サービス（海上和美）／図書館情報資源概論（岡野）／読書と豊かな人間性（箕浦龍二）／書物と図書館の文化史（岡野）／芸能論（前田憲司）／日本文化史Ⅰ（加茂正典）／日本文化史Ⅱ（坂東洋介）／世界宗教史ⅠⅡ（川又俊則）／日本宗教史（多田實道）／書論・鑑賞（上小倉）／書ⅠⅡ（上小倉）／書ⅢⅣ（岡野史）／書ⅤⅥ（山本のり子）／書ⅦⅧ（上小倉）／卒業論文（大島・吉井・田中・小堀・岡野・齋藤・松下・上小倉）

〔大学院〕古典文学特殊研究ⅠⅡ（大島・深津・田中）／特殊課題研究ⅠⅡⅢⅣⅤⅥ（大島・深津・田中）／国文学研究基礎論（深津）／国文学研

究法演習（深津）／国文学史概論Ⅰ（大島・吉井・深津）／国文学史概論Ⅱ（岡野・田中・小堀）／国文学原論ⅠⅡ（田中・小堀）／古典文学特殊講義AⅠⅡ（大島）／古典文学特殊講義BⅠⅡ（深津）／漢文学特殊講義ⅠⅡ（松下）／古典文学研究演習DⅠⅡ（田中）／国語学研究演習ⅠⅡ（齋藤）／課題研究ⅠⅡⅢⅣ（大島）

令和二年度研究発表会

発表要旨

趙孟頫の生涯と書の関係について

奈良奏美

趙孟頫は、南宋から元の時代にかけて活躍した文人である。彼は官僚として生きただけでなく、芸術の世界でもその才能を大いに発揮した。書については、王羲之に深く傾倒して復古主義を貫き、明代以後の書風にも強い影響を与えた人物として、高く評価されている。また、画の分野においても功績を残し、詩文にも優れている。

従来、元代の知識人については、美術史や文学史の側面のみから研究されることが多かった。



書道の分野から、趙孟頫の書法や筆法について研究した論文はいくつか見られるが、一人の人物をその生涯を通して捉える研究はあまりされていないように思われる。そのような状

況において、桜井智美氏は、趙孟頫が文人としてだけでなく、官僚としても政治の動向と関わりながらその生涯を過ごしたことに注目している。美術史の観点のみから捉えるのではなく、人物の生涯にも目を向けることは重要だと考えられる。しかし、桜井氏の論文では、主に趙孟頫と石碑の関係を中心に、彼の行動や多くの人々との関わりについては論じられているが、一つ一つの作品と、彼がその当時に置かれていた状況との関係については、詳しく論じられていない。本人が置かれた境涯を、書の商品と結び付けることは、その書への理解をより深めることに繋がるのではないかと考えられる。

そこで、本発表ではまず、趙孟頫の生涯を『元史』趙孟頫伝に基づいてまとめ、そのうえでいくつかの作品を取り上げ、その制作年代と彼の事跡を照らし合わせる。そして、その作品の内容についても調べることで、趙孟頫がなぜその作品を書いたのか、その作品には彼のどのような思いが込められているのかを考察していく。また、制作年代が確定していない作品については、その推測も試みる。

(博士前期課程)

三国時代における吉凶観

久知嗣

正史『三国志』（以下『正史』）は魏、呉、蜀の三国の歴史を記した晋の陳寿撰の歴史書である。のちに裴松之注に引かれた野史雜記や、宋代に語られた説三分から書かれた『三国志平話』などを材料として、元末明初に羅貫中によって小説『三



国志演義（以下『演義』）が作られた。

『正史』には吉凶の兆しは百三例、『演義』には百八例みられる。吉凶の兆しには自然現象や夢などがあるが、その中でも天文現象による兆しが最も多いことは『正史』『演義』に共通している。（『正史』では二十例、『演義』では三十一例）

ただ先行研究に『正史』『演義』の吉凶の兆しに触れられているものはほとんどなく（小川陽一「鳥鵲南に飛ぶ」（『道教と宗教文化』、一九八七）で『演義』の赤壁の戦い前夜、曹操の鳥が鳴いたことを歌った歌の一部が不吉であることに言及）、それぞれ全体を通しての考察はされていない。

また、中国古代の思想として、天地人がもともと一つの気から生み出されたため、全てのものは同じ気で繋がった存在であること、またそのため占星術は天の気を見ているが、その気は人ともつながっているため、天の異変は人の運命にも影響するという考えがあった（坂出祥伸「中国古代の占法」（研文出版、一九九二））。

本発表では『正史』『演義』に書かれている吉凶の兆しの中から、特に天文現象に関して見ていく。『正史』『演義』の比較を通して、『演義』での諸葛孔明の描かれ方の特徴、孔明の天文との関わり方について述べる。

（博士前期課程）

令和二年度講演会報告

有元伸子氏

三島由紀夫とアダプテーション

―豊かな「誤読」と変奏の世界―

千田ひかる

令和二年度十一月十二日に開催された国文学会講演会では、広島大学教授有元伸子先生に、「三島由紀夫とアダプテーション―豊かな「誤読」と変奏の世界―」と題してご講演いただいた。以下はその内容である。

題目にあるアダプテーションとは、原作を、映画・ドラマ・漫画などに改作・脚色する行為を指す。アダプテーションされることによって、原作は様々な受容者に届けられ、その時代や環境に適応することで生き延びていく。このように、アダプテーションには延命作用がある。

また、原作が映画などに改作されると、「誤読」や脚色が生じ、原作により明示されなかった解釈をあぶりだすこともできる。

三島由紀夫研究の中で、三島が優秀なアダプテーターであるという研究は盛んである。しかし、三島由紀夫の作品がどのようにアダプテーションされてきたかという研究はあまりされていない。そこで、三島の原作からアダプテーションされた作品に焦点を当て、原作では明示されなかった部分を考えていく。

三島由紀夫の『金閣寺』は、映画やオペラ、演劇などにアダプテーションされている。この『金閣寺』における「溝口が金閣を燃やした理由」と

結末の「現実の金閣を燃やして、幻想の金閣は燃えたのか」・「溝口のその後」という二つの疑問について、アダプテーションされた作品を通してみていく。

昭和三十三年に上映された映画「炎上」では、溝口が、父から聞いていた美しい金閣の支配から逃れるため、現実の金閣を燃やすが、幻想の金閣は消えなかった。そして、結末では溝口の死が描かれる。

昭和五十一年に上映された映画「金閣寺」は、ジェンダーをめぐる物語として再編され、有為子や母親という、女性が金閣より重視されている。平成二十三年に上演された演劇「金閣寺」は、溝口、鶴川、柏木という三人の青年の苦悩に焦点を当て、現代の閉塞感、男同士のエロスを描く。



教職員及び委員の学生のみ教室に集まり、その他の学生はオンライン形式で有元先生のご講演を拝聴した。

結末では、溝口は生きることを決め、客席へ行くという演出がされる。

このように、作品によって、原作のどの部分を最も重視し、どのような解釈をしているかが分かる。

今回の講演では、アダプテーションされた作品から、原作の解釈を考えていくという試みについてお話しいただいた。

一般に、悪い意味で使われることの多い「誤読」とは、作者自身も気づいていない要素を拾い上げる行為であり、アダプテーションされた作品の創作の過程で生じる「誤読」や脚色によって、原作が違った時代、環境に適応していくことが出来るという考えは興味深いものであった。有元先生が仰っていたように、創作と研究・批評には似た部分があるのだと感じた。

アダプテーションされた作品を通して、原作では明らかにならなかった疑問を考えていく試みが、とても新鮮に感じられた。私自身、原作を映画化した作品を見ることはあり、身近なものが、映画や演劇に改作・脚色されることが、原作の延命につながっているという認識はなかった。今回の講演を聴き、改めて考えると納得させられる。

映画や演劇のシーンを動画で流してくださいと、資料には当時のポスターを掲載したりと、オンラインでの講演にも関わらず内容が理解しやすかった。

最後になりましたが、ご講演いただいた有元先生に厚く御礼申し上げます。

(三年)

合格・就職体験記

《教職・三重県・小学校》

教職をめざす皆さんへ

上嶋真実

私は中学校で教鞭を取りたくて皇學館大学に進学しました。大学一年生のときに、文学部でも小学校の免許が取れて、教員採用試験の加点があることを知り、小学校も中高国語の免許と同時に取れるよう時間割を組みました。大学三年生のときには、高校書道の免許も取ってみようと決意しました。

卒業が近づく今まで諦めずに来られたのは、自分自身の努力も大切ですが、学友の存在が大きかったと感じます。国文学科の中には、小中高様々な組み合わせで教員免許を取っている人がいます。共に学び、議論できる仲間が身近にいたことがとても心強く、いつでも前向きに進むことができました。教員採用試験を受けるときも、切磋琢磨してきた良き友が近くにいて、二次試験対策も一緒に取り組み、安心して受けることができたと感じます。

さらに、先生方にも、お忙しいなか、勉強法の指導や、添削、模擬授業の講評をいただき、多くの人に支えられて、第一志望合格という結果を残すことができたと考えています。

これから教職をめざす皆さんも、人との関わりを大切にし、感謝を忘れず、満足のいく就職活動をしてください。

(四年)

《教職・三重県・中学国語》

コロナ禍での教員採用試験

新家萌愛

私が採用試験に向けて、本格的に対策を始めたのは、三年生の三月でした。その頃、新型コロナウイルスの流行により、集団面接が無くなり、教育実習が延期になるなど、あらゆることが変更になりました。例年と異なることばかりで戸惑いましたが、試行錯誤しながら採用試験を乗り越えることができました。

採用試験の対策として、限られた時間の中で、絶対に覚えるべきポイントを押さえることを意識しながら勉強を進めました。過去問を分析し、傾向を掴み、頻出の分野を中心に勉強しました。また、教職アドバイザーの方々や国文学科の先生方にご指導いただきながら、個人面接や模擬授業の練習に何度も取り組みました。対面での練習の機会は限られていたため、ネットでの面接練習も活用しました。

コロナ禍で、人と協力しながら勉強するような機会は少なく、心細く思いながらの受験でした。今後の採用試験についても、先が見えず不安を感じている方がいらっしゃると思います。しかし、その時々でできる対策をしっかり行えば、きっと合格に近づきます。教員を目指す皆さんが、夢を叶えられるよう応援しています。

(四年)

《組合・鈴鹿農業協同組合》

就職活動にて大切なこと

樋口明日香

私が就職活動を強く意識し始めたのは三年生

の秋ごろと周りの人より遅れていました。しかし、やるべきことを明確にし行動をしていたら内定を頂くことができました。就職活動をしていて一番大切と思ったことは、沢山の企業を行き当たりばったりで受けるのではなく、本当に行きたい、この企業で働きたいというところを明確にし、一社一社をよく知れるように分析することです。そうすることによって、志望動機や自分の話す内容に説得力がつき、企業の方にも熱意が伝わると思っています。また、自分の働きたい業界や業種がわからないという人は就職担当に行って相談するのがいいと思います。私もオープンESや面接練習など沢山お世話になりました。きつと皆さんの力になってくれると思います。

最後に伝えたいことは自分に「自信」を持つことです。面接で落とされて悩んだり落ち込む方もいると思いますが、反省すべき点は反省して気にしないことです。企業との相性もあるし、面接官との相性もあるからです。そういう場合は気にせず縁がなかったと思って前向きに考えてください。新卒で就職活動ができるのは今だけなので、自分にできる精いっぱい就職活動をして頑張ってください。

(四年)

国文学会活動報告

【行事】

(令和二年)

4・23

総会「manabaによる書面開催」(前年度活動報告・会計報告、新年度予算案審議、新役員紹介、研究部会紹介)

11・12

講演会「Teamsによるオンライン開催」

三島由紀夫とアダプテーション

―豊かな「誤読」と変奏の世界―

広島大学教授

有元伸子氏

11・26

研究発表会

趙孟頫の生涯と書の関係について

奈良奏美

三国時代における吉凶観

久知嗣

(令和三年)

1・31 会報 第49号発行

【研究部会】

上代文学研究部会(木曜日)

大島信生 教授

萬葉集

中古文学研究部会(毎月一回)

吉井 祥 助教

平安文学関係資料を読む

深津睦夫 教授

近世文学研究部会(月曜日)

田中康二 教授

近世和歌・国学関連文献を読む

小堀洋平 准教授

近代文学研究部会(月曜日)

齋藤 平 教授

近代文学の草稿・原稿を読む

齋藤 平 教授

国語学研究部会(毎月一回)

漢文学研究部会(水曜日)

道教関連文献を読む

岡野裕行 准教授

文学館・メディア史研究部会(木曜日)

文学館やメディアの諸問題を検討する

委員

委員

委員長 遠藤彩乃(三)

書記 東久保悠斗(三)

書記 東久保悠斗(三)

書記 東久保悠斗(三)

書記 東久保悠斗(三)

書記 東久保悠斗(三)

書記 東久保悠斗(三)

書記 東久保悠斗(三)

委員

委員

委員

委員

委員

委員

委員

委員

委員

委員

平成31年度【国文学会】収支決算書

平成31年4月1日から令和2年3月31日まで

収入の部

科目名	令和元年度予算額	決算額	差異	備考
新入生会費	597,000	586,500	10,500	新入生分 597,000円(転入科生分含む) 退学返金△10,500円
卒業生会費	0	6,000	△6,000	会費 更新分含む
教員会費	13,500	13,500	0	教員会員 1,500円×9人
受取利息	40	34	6	普通預金利息
参加費	80,000	81,500	△1,500	文学散歩参加費
研究部会	0	136,397	△136,397	中世研究部会返還分
前年度繰越支払資金	4,043,788	4,043,788	0	前年度決算「次年度繰越支払資金」の額
収入計	4,734,328	4,867,719	△133,391	

支出の部

科目名	令和元年度予算額	決算額	差異	備考
見学会・散歩会	480,000	460,738	19,262	文学散歩昼食代・観光バス手配代他
研究発表会	30,000	11,622	18,378	レジュメ印刷用紙代・昼食代他
講演会・学術大会	140,000	90,435	49,565	印刷用紙・レジュメ印刷代・文庫・書籍代他
研究部会	160,000	160,000	0	各研究部会2万円(8部会)
刊行物作成費	190,000	148,958	41,042	国文学会報48号印刷代・発送代他
事務運営費	5,000	0	5,000	
慶弔費	10,000	0	10,000	
運営雑費	3,000	3,382	△382	推薦証明発行手数料・振込手数料他
予備費	0	0	0	
翌年度繰越支払資金	3,716,328	3,992,584	△276,256	
支出計	4,734,328	4,867,719	△133,391	

令和2年度【国文学会】収支予算書

令和2年4月1日から令和3年3月31日まで

収入の部

科目名	令和2年度予算額	令和元年度予算額	差異	備考
新入生会費	522,000	597,000	△75,000	学部生86人、院前2人
教員会費	13,500	13,500	0	教員会員 1,500円×9人
受取利息	40	40	0	普通預金利息
参加費	80,000	80,000	0	文学散歩参加費
前年度繰越支払資金	3,992,584	4,043,788	△51,204	前年度決算「翌年度繰越支払資金」の額
収入計	4,608,124	4,734,328	△126,204	

支出の部

科目名	令和2年度予算額	令和元年度予算額	差異	備考
見学会・散歩会	480,000	480,000	0	文学散歩昼食代・観光バス手配代他
研究発表会	10,000	30,000	△20,000	レジュメ印刷用紙代・昼食代他
講演会・学術大会	90,000	140,000	△50,000	印刷用紙・レジュメ印刷代・文庫・書籍代他
研究部会	160,000	160,000	0	各研究部会2万円(8部会)
刊行物作成費	150,000	190,000	△40,000	国文学会報49号印刷代・発送代他
事務運営費	5,000	5,000	0	
慶弔費	10,000	10,000	0	
運営雑費	3,500	3,000	500	推薦証明発行手数料・振込手数料他
予備費	0	0	0	
翌年度繰越支払資金	3,699,624	3,716,328	△16,704	
支出計	4,608,124	4,734,328	△126,204	

会 計 西田紀香 (三)

講演委員 池上遥平 (M二)・兒島靖倫 (D三)

旅行委員 大嶋美輝 (二)・服部紋乃 (二)

会報委員 榎本文哉 (三)・森井菜月 (二)・

水谷護 (二)

一般委員 浅野有希 (四)・井上美瑠香 (四)・

浜村航貴 (四)・山崎成 (四)・

渡瀬菜南子 (四)

皇學館大学国文学会会則

第1条 本会は皇學館大学国文学会と称する。

第2条 本会は事務局を本学文学部国文学研究室に置く。

第3条 本会は国語学国文学の研究の促進及び会員相互の親睦をはかることを目的とする。

第4条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1、研究会の開催。

2、講演会・研究発表会の開催。

3、研究誌・会報などの発行。

4、その他目的を達成するために必要な事業。

第5条 本会は皇學館大学大学院文学研究科国文学専攻及び文学部国文学科に関係する教職員・旧教職員・卒業生・在学生 (但し国文学科学生は全員加入を原則とする)・また本会の趣旨に賛同して入会を希望する者をもって構成する。

第6条 本会の運営のために次の役員を置く。

1、会長 一名。

2、幹事 若干名。

3、学生委員 若干名。

第7条 会長は国文学科主任教授がこれにあたり、本会を代表して会務を統括する。幹事は

国文学科専任教員をもってこれにあて、本会の

事業に関する評議を行うものとする。幹事会

は随時開くことができる。学生委員は、大学院・

学部各学年より選出され、幹事会の指示を受け、

会運営上の通常業務にあたる。学生委員

として次の委員を置く。

総務委員 講演委員 旅行委員 書記委員

会計委員 会報委員 資料委員

第8条 役員の任期は一年とする。但し重任は妨

げない。

第9条 本会は年一回春季に定期総会を開く。

臨時総会は幹事会の議決を経て開催する。

第10条 本会の会費は別にこれを定める。

第11条 本会の会計年度は四月より始まり三月

までとする。

第12条 本会会則の変更を必要とする場合は幹

事会において審議し、総会の承認を経なければ

ならない。

付則 会費は次のように定める。

1、在学生は入学時に四年間分六〇〇〇円を

納めるものとする。

本会則は昭和五十六年十一月一日より実施す

る。

付則については平成三十一年四月二十五日より

改正実施する。

編集後記

○国文学会会報第四十九号をお届けします。

○お役目の順番が回ってきまして、今号より岡野

が編集担当となります。私が着任した平成二十三

年度は、中川先生が編集担当でした。第四〇号

の編集後記を読み返すと、中川先生が「ようや

く、最年少」という肩身の狭い身分から解放さ

れました」と書いておりました。

○その当時は特に深く考えずに会報を読んでお

りましたが、気がつけば私も国文学科にお世話に

なつてから十年が経ちまして、その間に歳下のお

二人 (小堀先生と吉井先生) をお迎えする側になつ

ていました。平成二十七年に小堀先生が着任さ

れたときには、中川先生と同様の思いを抱いたこ

とを思い出します。『最年少』の日々も、過ぎ去つ

てみるとあつという間のできごとですね。

○なお、冒頭の「研究室だより」で松下先生も

書いておりますが、今年度はフィールドワークと

文学散歩が実施できなかったため、例年よりも分

量が若干少ない形で会報のお届けとなります。

(岡野記)

国文学会会報 第四十九号

令和三年一月三十一日発行

編集・発行者 皇學館大学国文学会

(代表 松下道信)

516-8555 伊勢市神田久志本町一七〇四

電話 〇五九六 (二二) 六四五七

印刷所 アイブレーン